
ヒトの子

YUUMI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒトの子

【Nコード】

N9631P

【作者名】

YUUMI

【あらすじ】

『もしも、』平和な国に闇があるとすれば、こういうことではないだろうか？

『もしも、』気遣いの果てにまっているのが、常闇であるとすれば、こう言うことではないだろうか？

一人の少女が、闇に巻き込まれた「ヒトの子」を救う。

平和の道具として。

ボーイズラブ的な要素は一瞬で、恋愛要素皆無なシリアスな短編です。

前編（前書き）

内容にはほんの少し、グロイ表現をする場面があります。前編の始めと後編の最後に2、3文程度。性的表現も在りますので、ご注意ください。

前編

目の前にすぐ海面が見え、周りには多数の漁船が停泊している。

少し離れた街からは、その夜の賑やかさを反映するかの如くキラキラと明かりが見え、静かな港に僅かな光を分け与えていた。

だが、その僅かな光も突然の雨に遮られ、港にはより一層、静寂と闇が満ちた。空から降りて来た雨は、地面を打って静かに斜面を流れ、海へと向かっている。

その途中、雨の色が紅く染まる場所があった。

その紅く変化していく雨を視線だけで追い、佇んでいる少女がまた、その場には居た。

少女は、パツと見、小学生が何故、こんな場所に？と問いたくなるような幼い外見をしているが、幼いながらも物淒く整ったその幼い顔は、将来も期待できる。

だが、そこには無機質な感情の無い瞳と顔があり、底冷えするほどの無があった。薄紅色をした唇から漏れる息が無ければ、人形かと見間違えるところだ。

その少女は、その雨の色の变化に飽きたのか、ほんの少し視線をずらし、己の足元に転がるモノに眼を向けた。

やがて、目を伏せ、少女の唇が何かを呟く。だが、その声はあまりにも小さ過ぎて、地面を打つ雨音に打ち消され、少女自身、自分の声が聞こえているかどうかさえ、危うい。

そして、眼を伏せたまま、方向転換すると振り返りもせず、少女は、姿を消した。

その場には、人間の胸から上の形をした塊と、腹の辺りからソレのものであろう背骨が垂直に刺さり、その上に細切れになった内臓があらゆる方向に飛び出ている塊、そして、本来足の在るべき場所からは、白い骨とその周りに皮の剥いだ肉の塊が散乱していた。

その後、その塊のことについて、ニュースで報道される事は無かった。

…… - - - 10 years later .

広い部屋の中央に円形の寝台がある。

黒いシーツに黒い枕、そして黒いシースルーのカーテンが寝台を覆い隠していた。まさに黒一色の寝台。

その寝台の中央に柔らかなシーツに華奢な身体を沈み込ませ、黒いワンピース型のネグリジェに身を包んだ少女が横たわっている。

ネグリジェから出ている肌は、陶磁器の様に滑らかで白く、黒い寝台でソレは際立って見えた。薄紅色の薄い唇は濡れているように瑞々しく、動けば数多くの異性からの視線を集めてしまうのは必至だろう。そして、寝台のように黒く真っ直ぐな髪は、四方に散らばってはいるが、絡む事を知らないのか少しも乱れてはいなかった。

そんな優美な少女も寝顔だけは、あどけなく少々幼く見える。

闇の中で、なんの前触れもなく、少女は静かに瞼を押し上げ、黒い瞳が天井を映した。

故意に起こされた訳ではなく、また、眠れなかった訳でもない。だが、ごく自然に眼が覚めた訳でもなかった。

コン、コン。

ノックが終わると同時に返事も待たず、その人物は部屋へ入ってきた。

その失礼極まりない人物に少女は何の興味もないのか、はたまた寝ぼけているのか、――いや、恐らく前者だろうが――少しも

視線を動かさなかった。

まるで、ここに来ることが事前に分かっていたかのように。

部屋に入ってきた人物はドアを閉め、部屋に一、二歩入ったところで立ち止まった。

「黒澤裕次郎。年齢35歳。某貿易会社の重役。その裏で核弾頭の密輸。その他、人身売買、臓器売買。」

それだけを言うとその人物は、少女の反応をまった。

「・・・・・・・・・・。」

ゆっくりと右手を左肩の横につけてゆっくりと起き上がる。白い足が寝台から滑り落ちて冷たい床つき、少女は立ち上がった。

「データ。」

鈴の転がしたような声が薄紅色の唇から発せられた。だが、そこには温かみは無く、抑揚も無い無感情な色だった。

少女は、言葉と共にその人物――男に向かってスッと手を差し伸ばした。

男は、情報の入った親指ほどのデータチップを胸ポケットから取り出し、掌へ置いて少女に見えるように腕を伸ばす。

するとそのデータチップは、次の瞬間、少女の手の内へと移動していた。

それを少女は、寝台の横に置いてあったサイドテーブルの上にある機器に接続し、3つほどあるディスプレイを眺めた。

男は、目の前の非現実的な現象をみても別段驚く風でもなく次を待ち続ける。

「私が殺る。」

その言葉に男は微かに顔を歪めた。

「他の者に任せた方が得策かと・・・。」

男の言葉に少女はディスプレイから視線を外し、男へと向ける。

「この件は、肉体的関係が絶対に関わってきます。」

それを聞いて少女はクスクスと笑いを零し、笑い終わると男を見据え、首を傾げた。

そんな可愛らしい動作ではあるが、少女の瞳の冷さがそれを否定していた。

男は、少女の視線に、背筋に冷たいものが走るのを感じた。

「どうして？」

「・・・貴女は女性です。」

その言葉に少女は首を傾げたまま眼を細めた。

「だから？」

「・・・っ今回の容疑者の趣味は少年だからです。」

少女の視線のプレッシャーに男は、やや早口になり、なんとか維持していた無表情がほんの僅かに崩れる。

その男をしばらく黙って見ていた少女はふいに視線を外してディスプレイに戻した。

その行動は、データを見ればそんなこと一目瞭然だろう、といていた。

「私が殺る。」

もう一度繰り返した少女の言葉に男は、何も言わず頭を下げて部屋から退出していった。

男は、部屋から出て初めて自分の身体が冷え切っていることに気がついた。

部屋の中と外は同じ温度のはずだ。

正面の窓がラスに眼を向けると蒼白な自分の顔が写っているのを見てブルッと身を震わせる。

仲間内から話は聞いていたはずだ。真夜中に前触れもなく部屋に入っても起きてるし、別に起きているのを確認せず、容疑者のプロフィールを簡単に述べればいい。後は、指示を待っていればいいだけだと。

その通りにしたはずだ。なんの問題も無いはずなのに、目の前の恐怖と少女の視線のプレッシャーに耐えきれない自分を見て、出来れば二度とここへは来たくないと思ったのだった。

前編（後書き）

グロいかな？？汗

後編（前書き）

内容にほんの少し、グロイ表現をする場面があります。前編の始めと後編の最後に2、3文程度。性的表現も在りますので、ご注意ください。

後編

「ほう。これはこれは。」

紳士的な印象のあるその男は目の前のモノに視線を向けて口元に笑みを浮かべていた。

その横には、外国人とのハーフを思わせる金色に近い茶色の髪とブルーアイズの少年が何の感情もない瞳でつたつていた。視線をどこに合わせるでもなく、ただ突っ立っているのだ。

男は目の前のモノの顎を掴み、左右に動かして横顔を確認すると横に立つ少年を見る。

「仲間に欲しくないか？　それか、お前の玩具としてもいいが……。どうだ？」

その男の言葉に少年はゆっくりとそのモノへ視線を移す。

黒い長い髪を頭の高い位置で結わえ、黒い質素なドレスを着せられている中性的なモノ。綺麗な白い肌に薄紅色の唇。

急にソレの黒い瞳と視線がかち合い、少年は僅かにたじろいだ。

そこには保護者のような自愛の満ちたモノがあったからだ。

男はその少年が黙ったままのを肯定と受け取り、施設の者に大金を支払った。口止め料とともに。

その後、ソレをつれて屋敷に戻ると男は、少年の部屋の前で立ち止まると少年を見下ろした。

「いるか？」

そう問われて少年は、逡巡した後、コクン、と頷いた。それを確認した男はどこか満足そうに頷くと目の前のモノに顔を向ける。

「今日から、お前の主人はこいつだ。逆らうな。」

その言葉にそのモノは、少年へと視線を向けた。

「私はエセダです。よろしく願いします。マスター。」

そう言つてドレスの裾を軽く持ち上げお辞儀をしたエセダに少年は、無言で頷いた。

その様子を見ていた男は少年に向かって今夜、二人一緒に来るんだ、と言葉を残してその場を去つていった。

少年は、その背が見えなくなるとエセダの手を取り、部屋へ入るとエセダをソファに座らせその横に腰を下ろした。

「年は？」

「16です。」

「同じか…。」

少年は、少し逡巡するとエセダの身体に視線を向けた。

「どっちなんだ？」

「女です。サラシを巻いているので。」

「取ったら？」

「マスターがお望みなら。」

その返答に少年は男と一緒にいた時とは全く違った表情のある顔を歪ませるがすぐに緩めてため息を吐いた。

そう、教育されてきたのか。

「この部屋の中では、君は自由だ。俺もマスターではなくなる。あ

の男の前だけで十分だ。」

その言葉にエセダは立ち上がるとその場でドレスを脱いだ。
少年は驚いて眼を見開き、顔を逸らしたが、一瞬見た瑞々しい白い肌が脳裏に焼きついたままだった。

「マスター。」

その呼びかけに視線を戻すが、エセダは髪を下ろして、しかも何も身体に身につけてはいなかった。

当の本人は、別段気にする風でもなくサラシを手に持ち、どうしたらいいのか、と少年に問いかけていた。

「……捨てれば？」

なんとかそれだけを口にすると少年は、ハタ、と気がついた。

「あのさ、マスターじゃなくてジルって名前があるから、ここではそう呼んで。」

サラシを捨てて振り返ったエセダは微笑んでジルを見た。

「うん。ジル。」

そのエセダの様子にジルは俯いて口元を掌で隠した。

「どうかした？」

予想外に近い声にジルは顔を上げるとエセダは、裸のままジルの足元に座っていた。

ジルが顔を上げると同時に甘えるようにして膝の上に顔を寝かせたエセダにジルは、慌てた。

布越しに柔らかい肌を感じてジルは、動けなくなり、また優美なエセダから、眼が離せなくなった。

「ジル。大丈夫？」

その問いかけにジルはかろうじて頷いたが、エセダは納得が出来ないのかゆつくりと立ち上がるとジルの手を取り、そのまま寝台へ向かった。

その状況に我を取り戻して立ち止まろうとするが、優しく手を引かれているので、力で抵抗するのはどうかと憚られ、かわりに口を開いた。

「つちよ…何し…?!」

抗議の声を上げた次の瞬間、ジルは寝台の上で仰向けに寝ていた。エセダはそのジルの臍の下辺りに乗っかってニコツと微笑んだ。

「疲れているなら、休まないと。」

ジルは突然の事態に混乱した。まず、眼に入るのは甘美な白い柔肌だ。次を感じるのは不謹慎ながらもエセダの体温と柔らかな重みだった。

ジルが言葉をなくしているとエセダは、ジルに顔を近づけた。

「聞いている？」

その言葉を発した次の瞬間、エセダは寝台に仰向けに寝かされていた。

「エセダ。いい加減にしろ。」

真上からの声にエセダは微笑んだ。

微かに息が熱くなり、ジルの瞳には明らかな情欲の色が灯っていた。

だが、ジルは眼を瞑るとエセダの上から退き、エセダに背を向けた。

「服を着ろ。もうすぐ夜が来る。」

その言葉にエセダは、その黒い瞳を一瞬鋭くさせたが、それもつかの間、すぐに穏やかなものに戻っていた。

着替えるとジルと共にある部屋へと向かった。

ジルは扉の前に立つと二回ドアを叩く。

「入れ。」

その言葉にエセダは、ドアを開けてジルを先に入れ、その後続いた。

部屋の中に居た人物は白いバスローブを見につけてソファに座り、こちらを見ていた。

「ジル。」

呼ばれてジルは男に近寄るとその場で服を脱ぐ。その顔に表情はなかった。

男は、ジルを眺めてのどの奥で笑った。

「随分と幼さが抜けたな。」

そう言ってジルにグラスの中身を飲むように指示をするとジルを引き寄せ、ソレを弄ぶかのように握り、そして撫でた。

次第にジルの身体が震えるようになり、ついに膝を折った。

そのジルと自分の手を見下ろして男は笑った。

「今日は、随分と早いじゃないか。アレに欲情でもしたか？」

男はそう言うのとエセダに視線を向け、目を細めるがすぐにジルに視線を戻した。

エセダはその様子をじっと見据えながら表情を変化させることなく視線を滑らせ、男の近くに置いてあるテーブルの上を見やった。そこにおいてあるのはワインボトルとそれを空けるための道具とグラスだけだった。

「さあ、ジル。今日はお前が自分で踊れ。」

そう言いながら男はジルの体をエセダと向き合うように変え、ジルは指示されたとおりに後ろの蕾で男のそれを咥え、動き出した。相変わらずの無表情で。

エセダはその様子をじっと見据えていたがやがてスルスルと二人へ近づき、エセダは無表情なジルにキスを落とす。

するとジルは一瞬驚きを露わにするが、すぐに苦虫を噛んだような表情になる。エセダはそれを一瞥するとジルを男から引き剥がし、突き飛ばした。

「ジル。邪魔。」

エセダは、啞然とするジルを放って、男に向き直った。

男はまるでそれを知っていたかのように平然とエセダを見返す。

「で？ どうするつもりだ？」

男はそう言つてワインを煽る。エセダは妖艶な笑みを浮かべ、男の膝の上に跨ると男を押し倒した。

間近に見るエセダのもの欲しそうな表情に男は口角を上げた。

「ジルに焼いたのか？ ん？」

優しく問いかけるように聞いてきた男にエセダはパツと明るい表情で笑つた。

次の瞬間、男の喉にワインボトルのコルクを抜くあの道具が右から肉を押しつぶす音と共に差し込まれ、左から鋭い先を覗かせた。

男は何が起こつたのかわからないというように己の喉を触り、エセダを見つめた。その男の瞳には恐怖と混乱があつた。

エセダは妖艶に微笑むと口を開いた。

「黒澤裕次郎。年齢35歳。某貿易会社の重役。その裏で核弾頭の密輸。そのほかに人身売買、臓器売買。」

次々と己の情報をスラスラと語られ、男は朦朧とする意識の中エセダの口元を見遣つた。

「さあ、地獄へ堕ちろ。」

そう言つたエセダの口角が上がり、男は恐怖と不気味さの中で意識を手放した。

男が完全に事切れたのを見届けるとエセダは床に転がっているジルに視線を向け、白く細い手を持ち上げるとプレスレッドに口を近づける。

「デイスポーター。終わった。被害者の記憶は消しておく。表の世界へ返してやれ。」

そういうとエセダは呆然としているジルの額に掌を当てた。するとエセダの手とジルの額が淡く光り、エセダがゆっくりと手と離すとその掌を追うようににジルの額から光の玉が出てきてエセダの掌へ吸い込まれていった。

「幸せになれ、ヒトの子。」

そう言うときエセダはジルに背を向けて立ち上がった。

「君も人の子じゃないか。」

はつきりとした言葉が返され、エセダは立ち止まった。

「……………“ヒトの子”ではない。ただの“道具”。さあ、眠れ。次に起きた時、お前に新たな未来が待っている。」

そういつてエセダは無表情のまま、ジルの額に人差し指を当てた。するとジルの瞳は焦点を失い、瞼が閉じた。

「エセンダー。デイスポーターが参りました。」

ドアが開き、現れた人物がそう告げるとエセダ、もといエセンダーは一言。

「燃やせ。」

後編（後書き）

うゝ…あゝ…なんて言うんですかねえ。

この短編は、もしも…という題で書いたものなんですが…

感情のない子供。欲にまみれた大人。その欲の代償に体を遊ばれる子供。

貞操観念の薄い子供達。責任能力のない親の出産。等々。

私なりに、現代日本社会のある一部分ですが、表現を変えて書き綴ってみたものです。どうでしょうか？

少しグロイ描写をしながらも書き綴ってみました。

私の言いたいことは伝わったでしょうか？

子が親を、親が子を、大人が子を、友が友を、それぞれの思惑・感情は違えど、結果は同じ。

物騒な事件が最近多いです。

社会が豊かになればなるほど、人の心や精神は冷たく貧しくなっている気がします。

自分の行動、一つの物事、一つの事件をただ自分には関係ないのだと思ったりせず、一つひとつ丁寧に考えてみてください。

“答え”は自分にしか分からないものだと思えます。

たとえ、当事者でなくても少し考えるだけで、視野が広がるかと思えます。

―― アナタの“心”の蠟燭に温かさが灯っていることを

“気持ち”に考えるだけの余裕があることを

願っており

ます。

え、偉そうですみません；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9631p/>

ヒトの子

2011年1月8日19時58分発行